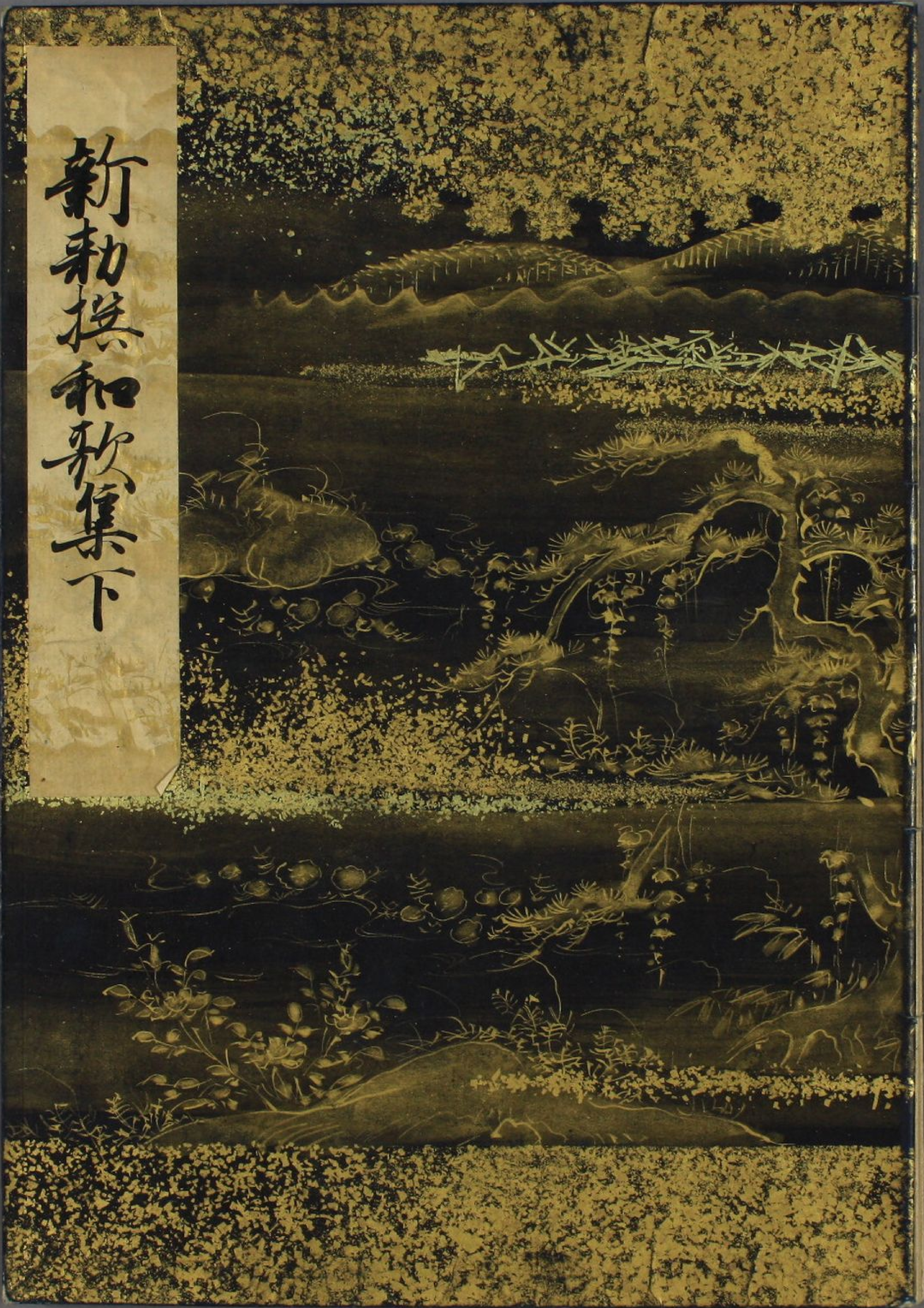
新勅撰和歌集　下



九曜文庫

新勅撰和歌集巻第十一

戀哥一

題しらす　よみ人しらす

葦よりもまさりてみえぬ人の戀しきは空にしめゆふこゝちこそすれ

いまよりはおもひよりやときゝしかと今そしる夢みぬ人をこふるものとは

越の白山ゆきかへる雲のおよひなきしらぬ人をも戀わたるかな

わかためはしらさよ千すゝ白浪のたちしか君はわすれはてなむ

いかにせむしらぬそふかきおもひ川みしよりすゝ玉のたえぬ涙は

難波江のこやに影かけてあまたれし思ひましにも猶せよかし

あさからくゆきかへるとも見えぬ人をこひわたるかなまたみぬにも我はすゝむ

女につかはしける　業平朝臣

みえはせてねはむしよりはまてゝ心をゆくかたによこゝろに

しらめて人はいかにかきく

権中納言敦忠

雲ゐにて雲ゐにゆくかたのこゝろこそふところ葦まよ附

返し　よみ人しらす

葦まよはゆくかたさしらさるこの世の人のこゝろゆるさゝ

下らふに侍ける時中院御製につかはしける　忠義公

色に出ていはぬこひしさすゝ人をしのはゝしめのしつかなるを

中将に侍ける時あひし女につかはしける
中納言朝忠
いそのかみふるともさらに人はおりやすらむ屋と誰にとはまし
返し　本院侍従
さらぬやかくなりぬとおもふなるらんのそこはなみたちて
和泉式部によみ侍りける　大宰帥敦道親王
うちそともあはずは物を中くにいひときまてもなかれぬく
返し
なゑのまれんよこゝとさひやまあるあつかひとゝまる宵をと
和泉式部
人のむすめにものいひ侍けるを女おやきゝつけていみしくいさめ侍よしきゝて
よみ侍りける　藤原高光
こひやせんわすれやしなんねともなくねさめともなくてあかしつる
よを
題しらず　道信朝臣
さまでとはわか世中をおもふかにかくても物となりぬするか
相模
いそかはまし見そかもとよすむあさみのかちにあひとあひと
五節のころまひ姫のひかけをとりてつかはすとて
藤原義孝

人まねくひとつに歌つくりて使をみなしして行すそくと念き

五節所にて侍ける女にしのびて見そめける

あくる日日かげにつけて侍りし歌

大宰大弐高遠

日かげさしし女の姿みえしよりうはの空なる物をこそ思へ

題しらず

躬恒

山かげにつくる山田の見えかくれかくにそね思ふ身をもなげさ

女につかはしける

業平朝臣

秋ぬまてあまりおほくなかさる海のみるめをかふまでやまむすら

返し

よみ人しらず

岩ねよりおつるみなかみつきぬとは思ひぞみちのなひとまる

題しらず

小町

湊入の玉つくりえにこぐ舟の音こそたてね君をこふれと

見るめかるあまのゆきゝのみなとぢになこその関もわれはすゑなくに

よみ人しらず

いと人ならぬみの海にあはでぞ沈むおもひをする哉

恋わたるこゝろの袖はうきにみちて見るめあらぬ涙そなかれける

堀河院艶書の合に人にかはりて恋歌よみ侍るとて

つかうまつりて恋すとめしける時よみ侍る

権大納言公実

うきねといひてくちぬらむもりまとふかくふかぬねまで

返し　康資王母

ぬらしみなせの川の埋木は下の恋ちにくちやはてなむ

恋十首哥よみ侍ける

神祇伯顕仲

恋の山しけきをさゝの露わけて入そむるよりぬるゝ袖かな

久安百首哥奉りける恋哥

待賢門院堀河

かくとたにいはまほしきを忍ふ草のかたふにしのせ世哉

袖ぬれて山ゐの清水いつまてか人めもるさそけとみるへき

皇太后宮大夫俊成

比ころはいはせのもりのしはふてるやせきはありともあさき川袖のみなとにわきかへりゆくともなきおもひなりけれ

清輔朝臣

なのつゆきはひのかせそのあふ刀人めやせき

我恋をいそてしすりはしあわりにはなてせきともそこ

二條院御時こひの哥めしけるに

権大納言宗家

人めをはもとめぬとせさうそ袖はなかれてあまる

百首哥よみ侍けるに忍恋のこゝろを

前大納言資賢

とひやなかたこそなまれなきさまとはいむ人のめにあまる涙

家にて百首歌よみ侍りけるに

後法性寺入道前関白太政大臣

くれなゐの涙と袖にせきかねてけふそ思ひの色にいてぬる

皇嘉門院別当

思河いはまによとむみくきをかきなかすにも袖はぬれけり

宜秋門院丹後

袖のうへの涙そいまはつゝまれぬ人にしられしとおもひしを

恋歌読侍りけるに

皇太后宮大夫俊成

みめひきぬるきれいと後白よりくまりあかひ草れ

刑部卿頼輔歌合し侍りけるによみて侍る

しける忍恋

いふてしら人はともあらはれん思ひの山は行く人の通路

跡しらす

西行法師

東路やしのふの里にやすらひてなこその関をこえそわつらふ

正三位家隆

人しれぬ思ひのうちに風さえてわたるかはへの門螢

百首歌たてまつりける恋の哥

宜秋門院丹後

いそねまくらひとつふしにはゝまて煙も浪もむすほゝれそなれて

源師光

わかこひはいつならひにか出ありし見えぬ人をおもひそめけむ

権中納言定家

松かねをいそへの浪のうつたへにあらはれぬへき袖のうへかな

堀河院に百首歌たてまつりける時

前中納言匡房

よそにのみ露の下草しのふのゝつゆとしらすやしのふ恋とも

藤原仲実朝臣

あふことのなきを聖のしめの露かにそぬれける袖はかなしき

基俊

浪まよりもれ浦によせ舟のかちにそさしてとはまほしきかな

久安百首歌たてまつりける時

清輔朝臣

年ふれとしるしも見えぬ我恋やときはの山のしくれなるらん

題しらす

大納言通具

人しれぬ思ひそめつとせめてや梅の木葉の露かゝりけれ

寂蓮法師

思あまりたちとふもあらすみむろ山おもひのさとの葉かな

参議雅経

まれにきく山のかひある玉つさをしるしやなにとよそにみん

右衛門督為家

わけ入山のひかけの露の玉ゆらも人にしられてねをこそはなけ

うへのをのこども未見恋といふ心をよませ給ひけるに

つかうまつりけるに　御製

山のはをいてける月のかけにみしそれとはみえぬ人のおもかけ

恋歌とてよみ侍けり

大納言實家

ゆくへそむら恋路のはてのおもひにはあはれいつまて人をまちけん

正三位経家

ゆくへは山とやまとを山鳥のこん恋にあふ松歌ありやと

入道二品親王家に五十首歌よみ侍けるに

寄煙恋

入道前太政大臣

ゆふ煙のそらや今はのきはまて我身ひとつにむなしき煙

百首歌よみ侍ける時恋歌

前関白

我恋のもえてそらにもたちのほる煙とやみてまたきえん

関白左大臣

わか恋はあまのいさりと袖にせきとめて枕のしたに人も

もしらす

八条院六条

わか庵の花をいかにおりかへん波こえぬ春まつしまは

千五百番歌合に　二条院讃岐

よし河の神のひ河に咲花のいかなるをと人のとへ

恋の歌よみ侍けり

殷富門院大輔

うらみのひれつ波の上玉のをのたえてもおなしなみかな

権大納言家良

思ひの波の玉のをたえてたえそ恋のこほれて袖にみえぬ

前関白家の歌合に寄縁恋

正三位家隆

みなかみの心もしらて玉のをのみたえんとすらん

家の歌合に　後京極摂政前太政大臣

吉野河やまさかれとせきいれつまはかれ中にはたえぬ

恋の歌よみ侍けるに

藤原頼氏朝臣

つれなさにおもひたえぬるかはりにも吉野川いつとしてとまるらん

前参議経盛家歌合によみ侍けるに

藤原盛方朝臣

よしの川せきいれしいもせやまたえぬまにわかるるかはのかはらぬ心

左京大夫顕輔家歌合に

法性寺入道前関白家哥合に

人まちしねやのまなけれは涙川袖のしがらみせぬ日ぞなき

平経正朝臣家哥合し侍りける恋哥

源有房朝臣

涙川袖のしがらみかけとめてあはぬうき名をながさずもがな

道因法師

流しこそあふせもあらめ涙川いつまでうきにふちせなるらん

題しらず

平重時

こよひゆく思ひとけぬる涙川いかなる淀の袖かすむらん

百首哥たてまつりける恋の哥

如願法師

山川のいはまにむせぶ水ならで我のみしてゝふむせぶらん

建保六年内裏哥合恋哥

権大納言忠信

末かれの逢瀬の河の川風になびく玉もの乱れてぞ思

題しらず

侍従具定母

なかまでのうき名をはらへ思ひ川あふせてもさえねせきやかるらん

正三位家隆

思川身をとやかくしらぬあふせえてもいのちなりけり

恋のこゝろをよみ侍りける

権中納言長方

おもひつゝやもめの門をいでしよりいかなる波にまかせても

皇太后宮大夫俊成

まくらにもえぬなとおつる波の人はおもひしらねば

ありとし

新勅撰和歌集巻第十二

恋歌二

寛平御時きさいの宮の歌合歌

よみ人しらず

夏虫にあらぬ我身のつれもなき人をおもひによりもゆるかれ

夜半にけさはとひはやりし人のためにこそわれも消えなまし

年をへてつもりてふかき梅の山よりもあふぬ思ひは我ぞまさるる

下らしに絶けり時女につかはしける

清慎公

たまのをはあまくだるひとつきそめし君がまもりは我ぞすべきかな

題しらす　伊勢

山川のすゑてそこのふかきも見しかりけりや忘しらるらん
こゝやまもとのつゆのこゝろは我なりや露と思ふにかはるとき

女と見んとはかりしけり

道風云

たち重は露もひさしき世中にいとゝ袖をも思ひすてかね

返し

おくつゆもものにふかき露の世はかりそめにも人と思ふな

とそりあけ乃女王

秋の月のつゆあちに女よはかりしけり

東三條入道摂政太政大臣

歌つくる夜の露けさふかくして袖はへしたりけるらん

題不知　本院侍従

庭の面につゆのみしもやぬれたらむ袖にもなほ消ぬをかな

道信朝臣

年ふれとつゆのしつくも人の袖や涙のたまりなるらん

よみ人しらす

さしのみてそなたにこゝろのかよひはみえて忘れなん人のこゝろ

忘らぬもおほかたのみになりけるかな月ともまた碑のかけ

秋おもひそ山川のみなかみにけさてこそかなしけれ

こやまもとひとつゆすゑの松の夜のこころもやむ時ともなく忘るゝなる

とこ月かりちれはまにたむしろのあちてもあてもおもてかゝ恵
あさしはおもやさへのこのてめたひてぬまはなけにみえて
さかりの鶴ふもとのの草わかゝらへてへよまて涙
志ら山乃雪の下草わけなれや下ふりえつゝ年のへぬ

廣川女王

恋草をちからくるまに七車つみてこふらくわかこゝろから

九条右大臣

松のねは蝶のもえ次とさしのかけにほひまさりをちを松
なきさかれたる待けり女まつりしけり

権中納言敦忠

しかまつてあまのねまさぬあはれなと思ひへるそこさろほと
つまなかりけり女まつりしけり

右近大将道綱

ひとよのはまをもむかひてぬ玉のをれあえみさしすゝ世をなくさん
まもしらす

よみ人不知

ねのひのあなたのそてこうちとてうつ宮のはしくもかなは
君まつとねられぬ目をもまつのまつはなれて松とそ之
いかなり松ふもとの波間かつまなかねよ袖のあかなん
わか世山谷の下かのおなひさへのみぬまはなれてそふ
秋とちきりて待けりふえあかまのしきゆへ

詠けるとて業平朝臣に詠ハせけれ
秋きてそひらくとおもふこの花しくれにふる哉
兵部卿元良の君にはじめてつかはしける
ふよのゝ詠侍る　修理
たくともなかなかなるを重行のひとつ歌によりかへるらん
堀河院女房の艶書をめしけるによみ侍る
堀河院中宮上総
恋しともいさやいつゝはるましもおもはぬ人はあさましくゆかしからん
返し　前大納言俊實
世をすてもあらはしそゝふ袖のうへやいかねとて物見心は

久安百首哥たてまつりける恋哥
大炊御門右大臣
たちかへりてゆくへも玉のとめえさし人かりそめにおもひそめけれ
左京大夫顕輔
ふみ通と聞しもなかなかむすひ初そめ掛ゆへとこそ
堀川院に百首哥奉りける時
権中納言国信
くりもあまてる神のゝや極めてふるまてあらぬ哉
恋のよみ侍けるに
藤原為忠朝臣

住吉のちとせのこそれ我まてやあはれ松のへ人の代をへぬらん

建仁元年八月の歌合に久恋

入道前太政大臣

まちわひくみせよとこまうつしをへよ松かねは波数なり

うへ乃松のことも思ひ久恋といふらんをつゝ海

つりけるつるに

御製

よそにのことひふりは年月のむかしこき数そつもりけるかなさ

建保五年四月庚申に久恋といふことを

よみ侍ける

權中納言定家

恋わぬる月のまちそてにへなかはおもふよ思ひつくまてたと

つれなしとやれかへつて人今は恋をまちもいとふもすみのゆく綿

建保三年内大臣家百首歌よみ侍けるに

名所恋といふことをよめる

参議雅経

わかおもひのよそにゆく松の葉かれをつれなき人に恋つゝ

源有長朝臣

いつまてかいつの波のこゝろなれなのなきさにたゆる思ひ

庚申久恋歌

源家長朝臣

わかおもひ人のこゝろゆくにまたしたはれいつまてたのまん

少将法師

題しらす　　殷富門院大輔

あひみてもはれぬ村のあつりのとつま迄とても何歎くらん

百首歌よみ侍りける時　　崇徳院御製

たのめこしことのはゝかりなりぬるさへいそや君に袖そしほるゝ

さかの世乃契ありきんとうりも月とくへてこそ人まてまめ

権大納言隆季

あふ坂乃雲井せきもる心かませやいもの志らうけとそふらん

前関白家歌合に寄あふ恋といふことをよみ侍りける

典侍周子

まれにのみゆふつけ鳥のねをそなくそのわかれもしらぬ関の ゆききに

恋歌とてよみ侍りける

殷富門院大輔

ゆきこえぬ相坂山の石清水むすはてぬるゝ袖と志らるゝのみ

中宮少将

いかにせん恋ちはおもふよ雲ゐへくゆきもとまらぬ相坂の山

祝部成茂

相坂の山はゆきゝれ路あれとゆきかぬ雲はその人の関

賀茂重保社歌合し侍りける

恋のこゝろをよめる

勝命法師

恋ちにはあつまのなきさ関あれはかよふ人とそとがめらるらん

藤原伊経朝臣

立帰りまたもこの河我浪をこひつゝわたる人をとはなし

題しらす

権中納言長方

伊勢の海おきつしらなみをつらぬきてあふさか川の月をみて見

寂蓮法師

松かねの山の秋かせにこゑたてゝさそふはかりの月を待かな

入道二品親王家五十首哥

参議雅経

うきみにはなにをかつゝむよそながらなけくやわれにおもひみえ

正三位家隆

恨ても我身ひとつの秋の月こゝろつくしのしらせるらん

関白左大臣家百首哥

源家長朝臣

こゝろせやおもひ入江の玉しほも身にしみわたるほとゝきす

立田のうらにみえけり

藤原秀能朝臣

数ならぬみはうき舟にうき身をはのりゆく波のいはひかたく

寂延法師

思ひかねあふ夜はうきはやきゝしはなれしよの雲は入あひの鐘

殷富門院大輔

うらみきてよるさのうら波をてのこゝろふかきあらき袖とみせや

崇徳院御時よ人々おのこともに恋歌よませ（ま）
つりけるに　皇太后宮大夫俊成

我恋ハ波こす磯のうはゝいはさらましつゝよるよるさはくらりて十首

堀河院御時殿上にて恋をさくりて十首
うたよみ侍りけるに忍ふる恋といふことをよみ侍ける
権中納言国信

うちむれとも君はしらしな恋乃涙よやしのふるまゝにねは
と

家よ百首歌よみ侍けるに不遇恋の心を
後法性寺入道前関白太政大臣

我恋ハおその浦風くさうひむるしくのこともあらぬ袖かれ

百首歌たてまつりける時恋歌
入道前太政大臣

いかにみる人の心ハとふまゝによるたまりのおもかけに

後京極摂政家よ百首歌よませ侍りける恋
歌
高松院右衛門佐

いてふつむあまれ忍ふるへとみつゝ君とみあふにうく涙かな

藤原隆信朝臣

よそにのみ涙もなき我袖や忍ふひとしわ袖の下草
しらす

正三位家隆

春の頃内にはべりし秋草のえだにみえし人を恋て
女につかはしける　前大納言隆房
人しれぬ袖の月にかけつる思草葉のうへそ露まかひける
女のゆかりを尋てつかはしける　左近中将公衡
浅茅生はいかにせんおなし野のたもとにかゝるすゝきのゆかりに
思ひとさえりてこそよみ給へるに思草を
よめる　前中納言国信
下もえにいかでふる野の思草なひくたもとは我にしらせよ
恋のこゝろをよみ侍りける　藤原頼氏朝臣
何とせんなき秋の山の尾花のおもかけにむすほゝれぬる
百首歌よみ侍りけるに不遇恋　関白左大臣
いつまてかつれなき中に思草むすほゝれぬる袖の露けさ
百首歌奉りける時恋歌　入道前太政大臣
あさましや草の葉山にふかくしのふるもの思ひのみしるへなりけり
参議雅経
かくしつゝみなみなさけとかゝれにしたみぬ物ゆへやまひしなまし

こゝろともあさちかすゑの露のまはいかにせよとかひとりなかめん

建保六年内裏歌合恋歌

正三位知家

人めもるかよひ路の末のしるしたにきえやとかへる

秋のけふりと

新勅撰和歌集巻第十三

恋歌三

こふとあめのあけゝる女につかはしける

實方朝臣

大か川井せきふかくもむすひけるやまぬ思ひのしるき歎そ

女まつりしける人まかりてよみ侍ける

郁芳門院安藝

越えやらぬ東路ときくひたち帯のかことはかりのあふさかのせき

百首歌めしける時

崇徳院御製

恋しくてたのむかたふの人まつとおやまかまつそわひしき

後法性寺入道前関白家百首歌よみ侍ける

小神遇恋　　皇太后宮大夫俊成

思ひいのちあえ〳〵はいかでまことにたのむへき

うきまてをなかさもあらし後そてのおもかけも神は知るらむ

法性寺入道前関白家歌合に

基俊

神かけて祈りし恋のつらさにはかひなきまてに

ぬれもしらず

藤原為忠

あさましきかなもこひわたるへき人のよそにみえぬるやかそ

京極前関白家肥後

人ありて山井の水のむすひてもわかれし人のゆくへそしらぬ

後朝の心を　　大炊御門内大臣

さぬるよなからとはかりみなりしものを明けぬれは別れし袖もかはきあへぬ

八条院高倉

あふことを又はいつかとしらねともなき人の涙をさそふ別れなりけり

家に百首歌よませ侍けるに

関白太政大臣

たのみつゝはかなく過る年月をおもひいつれはなみだなりけり

中宮少将

そのねよつきし別はおりしにほひりて君やみるらん

源有長朝臣

ゆふさくとのまくらみぬ霜をなきてうつろふ月の光

恋乃うたよみ侍りける中に

権大納言家良

うらめしたひふしのあひより夕つけ鳥ねはふまれ侍らん

東路のころもぬらしてかひあへぬよつゆの袖

同し

あくるまに花は月をいりぬれと都中空に雲そかゝる

陽成院歌合に

よみ人しらす

わかとは命にかへて暁のわかれの床をいそきとゝめん

題しらす

あさ夜とて手なれし鴫の白妙の衣の手枕いまはかへるよ

家の歌合に

後京極摂政太政大臣

忘れしの契りとたのむ別かな有明の月の思出にして

暁恋の心をよみ侍りける

徳大寺右大臣

はかなくも霧の籬にかぬ起きてゐるは暁としきさへや憂き

恋の歌よみ侍りける

八条院高倉

忘れゆく身に一ことゝはさりけむも涙もろきはわかそてかな

内大臣

なくさめぬ袖の別の一言をそなたにこひむるわかまつ

権大納言忠信

契りおくしらぬ命をたのみても暁かけてねぬ夜のこそあく

左近中将基良

今はとて別しまゝの名残をも忘れまよふてわか身のあはれ

前関白家歌合に寄鳥恋といふことをよみ侍りける

中宮少将

暁のゆふつけ鳥を忘れて我ゆゑまさるなみたなりけり

千五百番歌合に

侍従具定之母

今はゝとて身のうさをも聞あへぬ涙にきえぬへき

堀河院に百首歌奉りける時後朝恋

京極前関白家肥後

白川の世は白波よるさへにあけはてすはたゝ人のうき

後法性寺入道前関白家百首歌

皇太后宮大夫俊成

よる世川いかにねむとしらぬや涙はねまてもなれぬる

二条院に百首歌たてまつりける時後朝恋

太宰大弐重家

あひみても袖にかひなき露けさはわかるゝ袖にまさりける哉

関白太政大臣家百首後朝恋

源家長朝臣

きぬ〳〵のつらき涙よ誰なりて袖のわかれをしほりそめけん

別恋といふことをよめる

法印幸清

相坂のゆふつけ鳥も別路とうき物にてやなきそめけん

恋切恋といふことをよみ侍ける

藤原隆祐

いかにせん暮をまつへき命たに猶たのまれぬ有明を歎て

題しらす

西行法師

こととへかしまつ袖そしほる暁のなさけつれなき人は露かは

よみ人しらす

うくるしも暮をもまちて時ふかりけるはしは誰まさる

権大納言實國

うれしとも夢とも誰かさためけむ世の中しらてねけさ別は

女のもとよりかへりてつかはしける

徳法云

露むしもいつの有明かなかりせは何かさけかれんは

題しらす　　伊勢

あひ見てもはかなむことはいかならむ人ましのこそねかかれ

中納言兼輔

さめぬれはゆめにまさるはなかりけりうつゝに我そまとひ出にき

源宗于朝臣

白露のおくをまつまのあさかほはみすそなかなかあるへかりける

女のもとよりかへりてよみつかはしける

業平朝臣

我ならて下ひもとくなあさかほの夕かけまたぬ花にはありとも

題しらす

延喜御製

あさのこふ事はなかりけりぬ我もあふまも人を忘る

ありなしにつゆそ置ける

大宰帥敦道親王

恋といへは世のつねのとや思ふらんけさの心はたくひたになし

返し

和泉式部

世のつねのことゝもさらにおもほえすはしめて物をおもふあしたは

題不知

徳融云

暮まてもまつこそおもひつゝ曉の恋しきことのかきりなかれ

とりのねはいそきも出ぬ月影のかりおかれてあけし空哉

家の歌合に秋恋のこゝろを

後京極摂政太政大臣

み人の寝く髪れ面影に涙かきやるさよのたまくら

昼恋

大蔵卿有家

雲となり雨となるてふ中天乃夢にもみえよ夜ならずとも

恋哥とてよみ侍りける

中納言親宗

うたゝねのはかなき夢さめしより世の人の面とみるぞかなしき

後京極摂政家百首哥よみ侍ける

小侍従

雲となり雨となりても身にそふるむなしき空を形見とや

いつなりしとおもへや夢にみしよりそれさへに残るらん

恋哥とてよみ侍りける

従三位頼政

恋ふと夢にもみえて波にそのゝちもえぞそかなき

清輔朝臣

いかにして覚めさりけるなかなかそみもみさりし秋の夢

久安百首哥奉りける時恋哥

堀河

夢乃とみし人にもとこてねよいかにちぎりておもかげなからん

百首哥よませ侍りける恋哥

前関白

見るらんとおもひやみつゝあくかれてうちあかす中に暮やたえなん

権大納言忠信

わか心やみてはひとりかなしとも逢くとそたのむくる来とは

題しらす

藤原永光

ほとゝきすたのむしるしもむなし玉のやとりもれておもひ契りかはとは

師光家哥合し侍りけるに恋の心をよめる

藤原隆信朝臣

恋わひぬ須磨の浦わの世はしらすあまのいさりひなれ物おもはゝ

後法性寺入道前関白家百首哥

俊恵法師

暁のとりそうきはいもとしきぬ〳〵にならはねはしらぬ夜半のおもかけ

題しらす

よみ人不知

玉の緒のたえてみしかき夜半のまになれぬまくらのなみたの露

二条院皇后宮常陸

よしさらはあやしき程の名にしあはゝ哀さくらのなさけなからに

建礼門院右京大夫

三瀬川その契りはなき世なりせはなのみやせまし我はひとりと

内よりにておもひけるたのむことはひとつはなきとや

きゝもとしてつかうしけり

高松院右衛門佐

これも又いつわりそとは思ひなからこりすやまつの夕暮の空

恋歌とてよみ侍ける

中宮少将

偽と思ひしまゝぬ世中にはかなき契りのくやしかりけれ

百首歌めされける時

後京極摂政前太政大臣

涙せく袖に思ひやあまるらんなかむるそらも色かはるまで

うき身のたくひもしらぬ涙ちふ色もみて面影のそへぬ日そなき

式子内親王

よそりこし玉をもぬきよる涙のゆるとも逢小夜もぬ袖哉

建保六年内裏歌合恋歌

前内大臣

松嶋やよるも月みて風に志ほのなかりける思ひとふ色

権中納言定家

こぬ人をまつほのうらの夕なきにやくやもしほの身もこかれつゝ

題しらす

権中納言長方

恋をのみしかの海の志ほひよ玉もあまりにてそ袖はぬれそ

正三位家隆

ゆくわか身に千すかるゝをうらみてやをちやの嵐

平忠度朝臣

あふ事をねよ流りゝまれしみてもまたわかの尉なそふれ

源家長朝臣

漕る袖の湊のあまを舟さしのこるへとも通ふらん也

真昭法師

いかにせん浪路にてそゆく舟のあとにこゝろを懸つかは火

百夜とをまりけりふかきみのうしとそ思ふ絶

けり

正三位家隆卿

我恋はあふをたのもしとふくみてあけくれ袖に波そかけくゝ

題しらす

鎌倉右大臣

志らまゆみいそへの山の松の色のときはに物をおもふころ哉

同人目よ待けり時家よ百夜ありとも絶り

けりふかき恋とゝふらんと

前関白

わかまつにおもふ坂山のさしてこそくるゝと見えん雁のなきまん

むかしのや人のしのふさ露よつゆあさとあぬ袖の色哉

権中納言定家

ひとり秋は清士のみえし火やとそれはみよむろのやゆともなけ

正三位家隆

いそのかみよに泣こそすれあへぬ恋まつとられぬかり
ぬまて恋つゝそふる

新勅撰和歌集巻第十四

恋歌四

題しらす　人麿

夕されは君きまさんと待よのなこりそいまもねかてにする

足曳の山下風はふかねとも君かこぬよはかねてさむしも

小町

こぬ人を待となかめてわかやとのなとかこのくれかなしかるらん

身のほとゝ思ひしらていつせん方なくまかせてわかまくれは

在原滋春

忘れなんと思ふ心のつくからにありしよりけにまつそ恋しける

よみ人しらす

はなとりもこゑんそ過ぬれはあつまもかはらぬ月をなかめて

女につかはしける　猶法云

こひやすく下ゆふひのかけつゝなん我をも人のこひしかるへき

題しらす　延喜御製

しくまつゝ冬まさりゆく年よりも人の心そかはれるはしるか

九條右大臣

むかしの聖中とともにてつゝきそめわか世の色はかはらさりけり

よみ人不知

あつさゆみひきのゝ聖にこゝろすゝむ君かゆつかはなかれんとそや

梓弓ひきみひかすみ昔より心は君によりにしものを

世のあまたかさなゆふなかふくてふあらしのみひとつそしりて

ゆふまくみえしつゝさ山風さむくなりにけりちるをしとそかなしきは

紅葉のちるはちるこそよるも流されてことそわかれたのむん

女につかはしける　兵部卿元良親王

おほくらん人はみなとゆめ世さかの鳥ゆかんはおしとそ思ふ

返し　平中興女

世さか川のいはまをくゝる水とゆきをたえぬへくのみみゆるそ

題しらす　よみ人不知

桜かさねかさねの下葉露しあらはかゝりてゆくかひやはなら

寐覚の人へとも忘しむさうみゆ 我はゆかりの草葉にはいまはとて忘るゝ草のたねをたに人の心にまかせすもかな

人麿

玉ほこのみちゆきつかれいなむしろしきても人をみるよしもかな

よみ人しらす

中々に逢は夜なるとし月待て人まわりせそ恨まさりけん

額田王

君まつとわか恋をれは我宿のすたれうこかし秋風そふく

壬生忠峯

まくともいさしら露の身なれとも君かけてこそ身をはおもへ

躬恒

住の江はまつてねとこそ人忘ぬはなかくこ待けり うねへまちふく名をたつさ乃限しふまりいつゝ人をと待ち待けるよゆきさとれなくたちよりす待たれ

采女明日香

みやこ出てそもと宿もねみちのへにてゆきて逢坂の里 こよひの家れ所方にまちひけり時さへにそ待とて九条右大臣顕少将に待せうふ待よりしけり

右近

あひみては疑れに思ふかよそへ待つたまさと身にもあまて

清慎公おかまよ侍ける時つかはしける

式部卿敦慶親王家大和

恋しさのかきりなき人のかはらぬ人のことに月とともにみめ

このひてもれ思侍ける時

宗子内親王

露しけき草の袂を枕にて君まつむしのねをのみそなく

中務

月みても人の心もしらぬまはいとそともあはれなるかな

ありしよりまされはまさりてあはれなる月とともにも君そまたるゝ

二條太皇太后宮大貳

風ふけは空にたゝよふ雲よりもしらそこなるわかこゝろかな

おもひこの世わかとたゝねとも波の袖ふりつゝなかめ

堀河院に艶書の方めしける時

周防内侍

人しれぬ袖そ露けきあふことはかれのみまさる山のした草

返し

大納言忠教

かるゝ山のしたくさ葉にはまれやむすふのみはかた風なりて

あるし艶書とてよみ侍ける

権中納言俊忠

みましかのりそゝめふ作へまことも草ゆふてはあまる恋ともする

百首歌よみ侍けるに恋歌

前関白

湊川みなとを神よせさらましそ人の心をせよくちやきそめん
うしとおもふ身のゆかり袖のうきひとりみさふとはやきえん

題しらず

侍従具定母

わすれしひねおもはぬ人にこそなれてわたるもおもへは袖のなみたは

前大納言隆房

はまちとりみちをおふそてはりしまにしよのすゑもたえぬ涙か
よ

後法性寺入道前関白家百首歌よみ侍ける

宜秋門院丹後

忍ぶまに人の心のみえさりて我のみしけるわすれ草かな

俊恵法師

忘るなよわすれしのちのなかの道に我やはいひし君そ契し

逢不遇恋の心を

二条院讃岐

めのまへにかはる心をしら露のきえはともにとなと契りけん

題しらず

入道前太政大臣

忘るなよさえはとりふといひかはし思ひの葉に結ふ露

徳大寺右大臣

我恋はあふそてゆかぬなをさて京いよゆてとる我なくらん

前大納言隆房

たちかへり袖にうつりてゆくさきもあかぬなごりの荻の風哉

寂蓮法師

荻の葉をそよぐ小笹にかよひぬる我中川の水のうへにけり

藤原行能朝臣

なか月の時雨にぬれてねしよりもうらみもしらぬ袖そ露けき

宮内卿

よそにしつる袖の色にいでて人のこゝろは秋になる身と

八條院高倉

吹からに月はさえゆく風ならば我をや荻の末にしら露

俊恵法師

まねくとや荻のはかぜは秋風のそよぐにまかせ...

秋歌とてよみ侍ける

入道前太政大臣

荻の上に風わたりけり吹ことに...

関白

...

侍従具定母

中宮但馬

月草にかりにうつろふ袖の色かはれは人のこゝろの秋をしらする

藤原教雅卿

面影は猶ありし昔の月かけにねてそふるさくら袖のあさ露

藤原資季朝臣

しのふへの我衣手をさそへとてひとりやねなんいつか忘る

恋哥あまたよみ侍けるに

民部卿成範

思ひやれまくらかはしゝ袖の上の秋はともまてそまつ夕へは

侍従具定母

とはれぬはあさち吹こす荻風よもよほしてくる露乃枕を

法印幸清

よし又はしきりしそねかふへのまれなる秋の庭風もとふ

寂蓮法師

うらみわひひとひさえそもやすらはてなに面かけの忍てそ

俊恵法師

しらさりしやとわするともいつはりの世は面影にもとはしとそ思ふ

左近中将公衡

契しにかはらぬみも忘れなくその面かけは秋とゝりかれ

前大納言忠良

世のうさやこゝろえこけらん面かけはいつまて人の身にたへまさもせし

題しらす　　　　　　　　　大和宣旨

大空に恋しき人をやとるらんなからむのちにみよと思へん

和泉式部

みえもせん見もせん人を阿さことにおきてはむかふかゝみともかな

ちるまくのと枕はしらぬよりなかのあめふらさらとも

九条太政大臣中将に侍けるあひ侍てのち

枕の松かさしらせと見侍て

権中納言定頼女

心には思ふと思ふとしきたへの枕まてこそまつはみえけれ

亭子院によみてたてまつりける

在原恒興女

わすらるゝときはなる人の枕は君やまたれけり

女につかはしける　　　藤原高光

うちとけもねやはするうちしのひ人のさしにあひしまは

題しらす　　　在原惟成

かゝる恋のなかをとせん見てられつゝなきとけました夜の袖のしら玉

和泉式部

あふことを玉の緒にする身にしあれはたゆるはいかゝかなしと思はぬ

をさまるみたれてたつ玉とかや波も人のめにはみゆめ

よみ人しらす

あふことを今はかきりとおもへとも涙はたえぬものにそありける

よしさらは忘れはてなむと思ひてもさすかにたえぬ命と思へは

はつきちかきころさつきのはなのかりそめなりけれは女のもとへつかはしける

わきて猶そこにそ涙川そこともわかすふかくなりぬとおもへは

まかせける川の水えぬともしらてふかくなりゆくわかみなりけり

ゆく舟のあとなき浪にましりなは誰かは水のあはとたにみん

あちて思ひありそ思ふ人なかなかに思ひいてをもさそさきつ涙と

生行の末まても猶とたのみしに一夜つてつ

ふしのつきさに

新勅撰和歌集巻第十五

恋哥五

月ちかくあかりて女につかはしける

業平朝臣

思ふことのひとつもなくて人のかれゆくをみるへく

頭中将に侍りける時さふらふ草のよりみちてあつ

とふこともなかりしにつかはしける

しけつ

穏法云

忘れさせと人よりはいそ思ふ事草のふかきにほのまつるとそみる

返し　よみ人不知

いそてふかくにおもひしは思ふ事ともはかりの露やこぼれん

読人しらず

君みよとそれのゝやまにこはおもふとしれ萩そおもふ
はなにほふ秋の野風は雁とこそ色もなれ
むつことのまたつきなくにあけぬめりいつらは秋の長してふ夜は
玉のをゝあはをによりてむすへれはたえての後もあはむとそ思
あふことは玉のをはかりおもほえてつらき心のなかく見ゆらむ
人はいさおもひやすらん玉かつら面かけにのみいとゝ見えつゝ
ならぬ命の程はいかにみえさんかなしかるらん

光孝天皇御製

月のかつらおもひのほかにとふやなみのうへにもふるらんや

湯原王

めにはみてにはとられぬ月のうちのかつらのことき妹をいかにせん

貫之

こゑ人と月になさてやむは玉の秋とに我はなけきとそしん

和泉式部

つねよりはわすれ雲なかりしも出ぬいはそいつとの月をみえし

清原深養父

身をつくしこゝろはねとも今宵の月をはいくよの人のまつらん

大宰大弐高遠

とひやらんと空にいてぬまてひとり在明の月をなかめて

道信朝臣

物思ふは月みることやあはれなるなかめてのこともあはれかは

身のめとまりけるはまつりし書

よみ人不知

あふことをなのめなりにそみる月をなかめぬよひかなりき

返し

相模

なかめつる月にたのむのむかしあふことを雲ゐてそのことをあはさかき

法性寺入道前関白内大臣に侍ける時家に

歌合し侍けるによめる

堀河院中宮上総

忘るるか雲ゐの月なからはるかなるみもなかめけるかな

月前忘といふことをよみ侍ける

皇太后宮大夫俊成

こひしさのなかむる空にみちぬれは月も心のうちにこそとめ

千五百番歌合に

二条院讃岐

物思ひにそりこれや身のためとおもふまに月をのみこそまちわひにけれ

建保六年内裏歌合に

嘉陽門院越前

おく人もまれよそけゆく山のはにそらたのめせぬ在明の月

題しらず　正三位家隆

わすれなむ舟こそ流れ月の山のはにいさよふ波をもみえぬ哉（外）

殷富門院大輔

ゆく人は誰とはまちの月影をとふまでにまてに我かもしれぬ

権大納言家良

なかへてみやいらんとまいりしとひりりぬ梅ぞ月に

後京極摂政家百首歌合によみ侍ける

藤原隆経卿下

こぬ人をまつにこころも山の端の月まちいでてよはにふけゆく

建暦二年廿首歌奉りける時

正三位家隆

池にすむをしのねぬらむ水の上の月ほのかにすみ

猿声といふことをよみ侍ける

大蔵卿有家

猿こゑもしぐるる空の岩むらにむしろしきて月さえわたる峯の松風

百首歌に

式子内親王

いかにせん夢路にもたえぬ思ひゆゑやまぬむかしの夢の枕の袖

題しらず

大納言実家

よろ歌にいつは秋のよの月にさえ九重のうちをみえてこよひは

左近中将公衡

思寐の秋のよすから夢路まてもあひ見てつる鴫そなくなる

参議雅経

歌まくらあたまのをみしかくはこひもあえぬ夢もよしなし

正三位家隆

いかにせん三輪のしるしのあるならもおもひく秋のゆめとこそ見え

殷富門院大輔

ゆめにさへまひとめ見しおもかけを夢ふしてはなき世にも

清輔朝臣

袖ふさきともこそねられ夢にもつらき秋の夜の月

道因法師

夢にたにあふ夜しら人のみえつるはあともなくさめ枕のなみた

二条院讃岐

あはれなる夢見る夢のうちにこそ夢ならぬ世の事も見えけれ

恋哥よみ侍けり

藤原重頼女

昔見しも昔の夢かうつゝかねさめぬる人そなき

夏夜恋といふことをよみ侍ける

按察使兼宗

夜もよもなくなくたのめしおもかけを

題しらす　権大納言家良

磨のうらやまに風にしけすゝのあそひしよそにえしらぬらん

建保六年内裏哥合恋哥　権中納言定家

あふとみしそのよのゆめも身にそへて涙にたえぬよみを任せん

従三位範宗

いかにせんねさめに出しよ人をとひ身をそれかたきと

題不知　従三位範兼

なにしおはゝやまの蜂のすにつくしまのかけとらん

前関白家哥合に山家の夕恋といふ心を

よみ侍けり　正三位知家

むら雲に山のはのゝ夕暮をよそに見しにも袖はぬらさし

建保三年内裏哥合に　藤原信実朝臣

東路のふしのしは山にそてはぬれつゝよるにかはれとしらぬ

太政入道内大臣

とほ山のまつのみさをに年ふれはまつとそねをはなけかれ

家哥合に恋哥とてよみ侍けり

後京極摂政前太政大臣

秋の夜もむかしの月の影は誰とみよと君かかれにし物とこそなれ

題しらす　左近中将公衡

夕煙へたてもみえぬつかのまに君によそへて命ともかな

京極前関白家歌合に恋のこゝろを

大納言忠教

恋しなは君ゆへとこそしられてやむなしき空の雲となりなん

題しらす　土御門内大臣

定めなき風にさそはるゝ雲なれやわれゆくゑもしらぬ恋

後京極摂政家歌合寄雲恋の心を人にかはりてよみ侍りける

前大僧正慈円

恋しぬる我か煙の雲とならは君やよそにやなかれて忘れん

寄雲恋　正三位家隆

思ひあまるそなたの空も又ゆふ日さしかくされてゆく雲のはてもかなしめ

千五百番歌合に　按察使兼宗

人心木葉ふりしくえにしあれは涙の川も色かはりけり

百首歌奉りける時

大炊御門右大臣

ゆくくとおつる涙の数そともすあひみぬよそれつらきとなかめつ

皇太后宮大夫俊成

いかにせんおもはれてこそとふらめとうらみかほにもわかおもふかな

待賢門院堀河

こゝろからなれまたれしさへにたえぬよつきそてのうへのあまの

題しらす

従二位範宗

あはれなりかゝれは雲ゐの月日のかけもなか中にいそきさためて

恋のこゝろおもきこゝろみたけつゝに

藤原資季朝臣

我のみやいかなかしれぬ世のならひとおもひとしらん

千五百番歌合に

家隆

後の世をなけきつとふかいひそ山端のとをつきさは月にかはるよと

源具親朝臣

後の世と身のむなしきをおもふにも契りたかねはあはれなる世は

題しらす

藤原永光

のちの世といひてそ人に別れしをおもひそまてとこひしなぬ命を

津守経国

あふ事のまれなりとせし月日へてわすれかたくの身をそうらみん

賀茂季保

おなし世はなくとありかはいふことの昔かたりになりにけるかな

寄命恋といふことをよみ侍ける

律忠法師

せきかぬる涙の露の玉のをのたえぬもつらき契りなりけり

右衛門督為家百首歌よませ侍りける恋歌

下野

うしとのみおもひはてゝややみなまし契りし人のかはる心を

関白左大臣家百首歌逢不遇恋

従三位範宗

年へてもいふとふ程はいとのなかなかつらたえやせん

恋十首歌よみ侍りける時

権中納言定家

身をしらぬ袖みたさき玉の緒にみたれて物を思ふ身とは

百首歌よみ侍りける逢不遇恋

後京極摂政前太政大臣

うつろひし花にまされる人の色こそ恋に秋風ぞふく

建保六年内裏歌合に

前関白

めのまへに風も吹あへとてうつりゆく心の花も色みえけり

中納言定家朝臣のもとをとみをみはへりて

侍られいまあつ　　よみ人しらす

あふ人の心風もとをせていまつきぬすやまはれん

藤原公蔵人少将に侍りける時臨時祭舞人

よそにていてぬり給けるハりのみ車まへ
ふらよりてこれをとひてとやくれた
なふてうちとちらん君にと涙よ袖にぬれにと
おなし人まひ人てちりくるもろのまへ
ともとき給へれハ　本院侍従
まり夜さそるきふきたゆふてまちかきも雪まてとおもをかな
雪ふり侍ける朝梅壺女御につかはしける
天暦御製
冬の夜の雪とつもれるおもひをハいかてかけふにもやさえん
御返し
更衣正妃

冬枯の梢のねさめよりまさりてこそんつもれる雪の数をとなるハ
女につかはしける　中納言朝忠
なるまてにわかをこそまてはせ川おもせたのみてやとまけか
題しらす
光孝天皇御製
山川のたきつとまもにたえ人ぞしれてこれハ契りなきかな
秋ふけてつまよとなくさ待けるにおけ給
法成寺入道前摂政太政大臣
らはまけれハいかにしてつかはしける
秋すくるかひもなきそ枝のもちにてまさるらむ
返し
紫式部

身ならしとわりたくくるしかなはへおきてつらふ梅かえ

題しらす　相模

秋とおもふ君と君とのつ妹乃君ハくるに風の音そまさるらむ

貫之

花なしてあれなりけりのいはすこにおくなる人の心なりまさり

新勅撰和歌集巻第十六

雑哥一

春ハたゝしめ鶯乃なくなるさき待けるハ　選子内親王

山里ハ花の匂ひ乃いかなれやとふ人もなくひとへ匂ふらむ

題しらす　禎子内親王家摂津

宮ふかきみ山の里にはしむへいすむそやまとことなし　式子内親王

ゆき消てうらめしきこえハ草ハるつふのへも春めきにけり

わか草をよみ侍けり

入道二品親王尊助

春日野にまつうつろへやかねる梅か枝にいまそさきそむる梅の梢り

前大僧正慈円

武蔵野の春をはさこそかりさねはまめの葉もゆかりに
花しらす

殷富門院大輔

命ありてはいとゝしさめくるとしの春にならはゝ

千五百番歌合に　二条院讃岐

はるかなるもとみよしのゝ山の白雪さえてにほふ

題不知　按察使隆衡

霞みてわかやとにほひぬる昔の紅はゆかりのみ

権大納言家良

見わたせは山のかすむ春としも月はかはらてそふりけり

関白左大臣家百首歌よみ侍けるに霞を
よみ侍ける

中宮少将

はなさそふまつの梢もみえましに霞をたのむ春のやまさと

賀茂成助

梅花さかりになれは山さとはゆきかふ人の心をそしる

春雨のころなる梅花をよみ侍ける

土御門内大臣

こゝのへにかはらぬ梅のにほひそていつもむかしの春はわすれさ

前関白内大臣に侍ける時百首歌よませ侍
けるに庭梅といふ事を
源信定朝臣
やとりして梅のたちえもとめけるあるしもみえぬよその宿かな
題しらす
下野
有明の月は霞にくもれとも見し世にかはらぬ梅のにほひそする
行念法師
梅か香の里まてにほふ我やとにあかすさそひて春風そ吹
百首歌よみ侍ける春歌
侍従具定
春の月かすめる空の梅か枝に契りもおかぬ人そまたるゝ
土御門院歌合に春月といふ事をよみ侍ける
陰明門院小宰相
大かたの霞に月そくもりぬる身のおほろなるあはれなりけり
東山にこもりてのち花をみ侍て
前大納言忠良
思ひいてゝ我身とともになくさめにもなくて昔の山桜かな
西園寺にて三十首歌よみ侍ける春歌
入道前太政大臣
山桜みねにも尾にもうへおかん見ぬよの春を人やしのふと

庭の花といふことをよみ侍りける

祝部成茂

春をへて三代の花園まかすなり我のこゝろのまゝ

もしらす

如願法師

あるかりとなにうらみけん山桜花のみ世のうきをわすれけり

世をのかれて葉室といふ山寺にこもりゐ

て侍りけるに花をみてよみ侍りける

前大納言光頼

いまや我もとにはなちえし我こそなさてもくれぬ世よさりともすまず

二条院御時殿上にはなくのそこまで侍りけるに

除目参人にて南殿の花をみて思ひ

丹波かみになりにつかはしける

藤原隆信朝臣

忘るなよ遣雲井の桜花わか身は春のよそになるとも

世をのかれてのち栖雲ちふまかりてへり

侍りけるに大内の花のさかりにみえ侍

るをききて思ひいでてひとりにそ頼政につかはしける

皇太后宮大夫俊成

いにしへの雲井の花もこひしくて月とともにそこゝろ春

返し

従三位頼政

雲ゐまて花も昔をこひしくは月をみることも思ひし世
浄光院にて雨のふりし日ゆふかけの
花をとてよみ侍りける　素暹法師
かへるさそ昔ならぬにぬれけるは人はたゝ花のしつくか
花を見てよみ侍りける
平重時
よしさらは見つゝくらさむ桜花世のうき事は思ひ捨てん
源光行
月花をおもひかへしてみし雲よりのちはなにをかなかめすさまし
題しらす
藤原頼氏朝臣
しら雲の山桜花いくよをへて木ゝにまた咲らん
花前をよみ侍りける
前大僧正慈円
吉野山花をもおもはて花さかはみるまのこころや月にかなしき
落花をよみ侍りける
入道前太政大臣
花さそふあらしの庭の雪ならてふりゆくものは我身なりけり
閑居花といふことをよみ侍りける
とはれしも雪とそみえしさくら庭の花ちりけるはあとたえにけり
按察使兼宗

題しらず　侍従具定母

めくりあはんかきりはしらねとも命[illegible]春を[illegible]

藤原経実卿

くれてゆく空をやよそのしらねとも春のなこりは[illegible]

太皇太后宮大弐四月はかりにさきたるさくらを
をりてつかはしけれハ

京極前関白家肥後

春はいかにちきりおきてかすきにしとおくれてにほふ花にとはゝや

四月まつりの日あふひを[illegible]女につかはしける

藤原雅経卿

さひしさやその[illegible]山のあふひ草[illegible]よそに[illegible]かな

題しらず　相模

[illegible]えて人をまつ[illegible]

[illegible]給け
れは　上東門院小少将

あまのとの月のかよひちさゝねともいかなるかたにたゝくくひなそ

返し　紫式部

槙の戸もさゝてやすらふ月影になにをあかすとたゝくくひなそ

やしなひ給けるむすめに五月五日くす玉
たてまつらせ給けるにかはりてよみ給ける

右近大将道綱母

くもゐにはおひなかきあやめ草ふかきこころのねはたえにけり

返し　東三條院

あやめ草ねにあらはるゝこゝろにはひとをこひしとまつかな
かりふしと結けるかな

権中納言定頼

五月雨の影に軒にかゝる世にふるまゝは袖そぬれける
なかきためしとよみ給けり

藤原行能卿下

みしま江の玉江のまこもかりにこそそなれゆくらん五月雨の空

夏月とよめる　藤原親康

三まては椎ともそふる思ひのかけ葉もさけてふる月影

初秋のこころをよみ侍ける

祝部成茂

吹風は萩のうはゝにおとつれて秋とはしらすちきりしはなを

権少僧都良仙

世といふはいみかへしとまちて萩の葉風はあかねさゝれ
と

兵部卿成實よませ侍ける萩風といふ心を

藤原信實朝臣

なくさめしかたもなきつき萩の葉よりそよとわきて秋風そふく

もしらず　　源季広

かりそめの世にはなれじとおもひしかど花はちるやと
実方朝臣飛香殿のたまへ入りまゐりてものとひさむ
ときひく給ひけるになりぬとて女房のよみ
給けり　　よき人のまじりて次
樵風心をもしらずして花落ちてにむかひて人は誰そと
殿上人返しせんなと申すかれまいり
おもひなしと給けり　　実方朝臣
風のまにまに空にむかひて花落ちぬ葉にも露もしかなし
円融院御出家の後八月ばかりに月のほどに

まうでさせ給けるにともにた右大将済時
まいりて同じ車にてまいり給けるに
按察使朝光　于時左大将
秋の野をいまはとえてかへる善には我も出ねぞ送りける
返し　　左近大将済時　于時右大将
虫のねは我かきくらしへおちそへて野原の露のたまやらん
後朱雀院御時祐子内親王ふぢつぼに
おはしまして給けるに月くまなかりける夜女房
むかし思ひそへてなかめ給けるに　梅壺女御
まへのかり給けるそきゝてことよせて給て

菅原孝標女
あまのとを雲ゐなからもよそにみてむかしのあとをこふる月哉
五十首歌よみ侍けるに
仁和寺二品親王守覚
昔ふ海のそこにやとしてそ月とい袖わかれのとこふりかな
思しらす
鎌倉右大臣
おさらふおかさ宿のかりにしいて世の月すみけん
思ひいて昔をしのふの袖のうへにありしにもにぬ月そやとる
月前懐旧といふことをよみ侍ける
入道左大臣
なかめつゝ身にしられぬる世中にいかて昔の月はさえけん
家に五十首歌よみ侍けるに
入道二品親王道助
こゑさゝ竹乃葉よけてもる月は昔乃世の影とふらむ
元暦のころをひ賀茂重保人々に歌をすゝめ
めて社乃歌合し侍けるに月をよめる
権中納言定家
そのかみやへぬ昔おもひいてはこのこの月け
秋唯禅のつゝく秋ふすむ月をみんとてさ
とわぬかきもとにすみわひてなりつゝしはてゝれい

高弁上人

月影ハ入山もわすれともすまぬみねやまの遠の
のちにこそ見んを待けれハあつ

法印頼清

いかりそ秋の月の行まへさへみやまハ雲とおもふら
世をのかれて高野山にすみ侍ける時よ
める

参議成頼

多れ山にすまても人のとひこすハ三川に誉月ハ照ま
思しらす

西行法師

おハれぬるかなそらにも出さ月やハと思ハヽそ山

法印慶忠

身はつねに花と月とてすこしにし月さへ老の身にそふ
老ぬれハいしいかりと思ひて文殊の秋の月を見るかな

正三位家隆

源家長朝臣

こしのゆくへおもひくらせる世中にむそちあまりの秋の月かけ

寂延法師

いく旅とかそへても月のかなしきにのこりとらぬ身の旅つ

侍従具定母

むかしのみこひしき色そむかしそ月はむかしの秋のよ

殷富門院大輔

今はとてみけん物の衣まてもおもひしらるゝ秋は此月影

楽府をおもひてよみ侍りけるに陵園妾の
心をよめる

源光行

とふ人も山かくれの松の戸をとさしやまはくさともなき影

望湯臺の心をよみ侍ける

素俊法師

よそにみし夕の雲とおもはましやまたそれとも山の月

旅の月といふ心をよめる

法印道清

身はかくのたひのねやこの月の影まてまよふのみそてにとまらぬ

題しらす

如願法師

この里はことにはまつふ霞の色をはかへてもそむくもちゝれ

藤原基綱

住吉のまてそ風をまちとりて行かひにふる嫁は程そふる

行念法師

立田山秋のみささきのくはなとふるもみちの中て

明年叙爵せんとて侍りける頃月を見て

とてもふちつかめのみちの月をかへにまかりて

よみ侍ける

藤原永光

人はみなおのれ秋とそたのむらんなふとわかまくとちる紅葉を

高倉院御時ふちつほのもみちゆへしにて

やまとくによむとひとかりきちをつかうまつりける

建礼門院右京大夫

吹風も枝にのとけきみよなれはちらぬ紅葉の色をこそみれ

前関白内大臣に侍ける時家に百首歌よませ

侍けるに暮秋歌　源有長朝臣

紅葉はちりひとりつゝ夕暮はいつまて花と秋のゆくらん

建保三年五月歌合に暁時雨といふことを

よみ侍ける　権大納言忠信

暁とうちも人はまたねてこそこゝろあさくもふるしくれかな

高階家仲

村雲はまきれにそめぬ山よりもしくれになかき有明の月

題しらす　源泰光朝臣

くもりゆく月さへまふりそふおはそのよはの色をこそみれ

冬歌とてよみ侍けるなり

相模

木葉ちる嵐の風のふくころはなみたさへこそおちまさりけれ

歌くと侍けるころもみちちるかとそよみ

侍ける　前大納言公任

白菊にまた霜にもさひてかつかれる昔をとふらふなり
冬ころさとにいて大納言三位につかはす
紫式部
うきねせし水のうへのみこひしくてかものうはけにさえそおとらぬ
返し
従三位廉子
うちはらふともなきころのねさめにはつかひしをしそ夜はにこひしき
題しらす
行尊
冬の夜はとこそおとらさすかのはしともかはとたえてそすゝしさ
六條右大臣小忌宰相にてたちて侍けるを見て
よみつかはしける
康資王母
おみ衣へてぬるものと思ひやもけのつゆにまかふところも
返し
六条右大臣
ひかりそへてやかけけるかなをみ衣そのひかけのみにさへそさえ
新嘗会をよみ侍ける
中納言家持
足引の山ゐにさひをかけてなるらんやくらふにもあめとさかゆん
百首歌よ
式子内親王
あまのはらそらさえとほる冬のよのかけのみをとみて月をかなし
五節のころ権中納言定頼よさしてひ
けふつかはしける
よみ人不知

ひさかたの雲のうへまかけてみしひとをおもふる星の月

なきくしと侍りこりをおもく侍りける宿のなり
こ皇太后宮大夫俊成身まかりにつかはしける
左近中将公衡

名こりそと思ひ出えてかなしくも雪ふるらむそなさこつらは

題しらす
伊勢大輔

忘れて年くれぬる名残のみ人とともにみえさせ給ひ
としふれはおもひきるなしてそしとたるめる

めくりやと侍れは
選子内親王家宰相

琴の音と松風つかへまさるにおもふてさめそしめ嫉

返し
選子内親王

ことのねの松風のへよさきこゆまゐる家おほかひくきそとも思

題しらす
殷富門院大輔

なかなかに色かねむ梅の香ふかとなりしとたぬて春はさかり

入道親王家にて名にしふかくとよみ侍る
法印覚寛

春ふかきかすみのへたてゆきされぬかうけて咲る梅かえ

としのくれぬとよみ侍りける
寂延法師

いくたひのこよひそふりつもらむみゆきのくれまそとしてぬかなさ

行念法師

ゆくすゑもまたぬ命よはゝせてそもおもひさとかつよやまさらし

寂超法師

宮つりの山路の冬をかさねてハおもふ我身そふりにけるかな

題しらす　相模

さらてたにかなしきものをおもひなりはてゝわか身のまそそいとかなしき

新勅撰和歌集巻第十七

雑歌二

題しらす　業平朝臣

我袖ハ草のいほりにあらねともくるれハ露のやとりなりけり

世ハといふそてまたにやいはさ我ひとりさへなけれハ

よみ人しらす

あさなけに世のうきことを思ひつゝ歎せしまに年そへにける

和泉式部

ゆくにまたあまたとふさまてもなきぬ時のあつさとも

いかにせんおもひしことそすまひれふるさとハ袖のみぬれて

けり

あさち原野にはつ露もとまらぬをおのか月とやいふらん

こゝ道ともゆるさぬ世の中にかへりおもひ入とする

俊頼朝臣

忘しともいはてそこふ玉さかに色ちらへ人さ音なら袂

堀河院にて百首歌たてまつりける時

基俊

いまへと思ひしかともなかしさはなきをとめにはこそおそかさき

成尋宋朝にまかりけるにとなきさて

よみ侍ける

成尋法師母

なけきつゝ秋月はなかれそぬいまはこの世とこそまよふか

述懐の心をよみ侍ける

鎌倉右大臣

思ひいてゝよるはすからにねをそなくありしむかしの世ゝのふること

世にふれはかはりとの気色みすとに見えす涙の露そこほるゝ

百首歌の中に述懐

惟明親王

なへて世のうきひとへやとおもひしといひてもあまる涙を

知らす

前大納言忠良

春日山いまは一なひと時きてみちかえぬまて物の涙く

皇太后宮大夫俊成

みかさ山いつゝに道苔の下おもひとこそかりけれそつ人
よりの海を硯の水にたゝへともわかなさかなさ道

源師光

行末にくらん身ともたのむ道て我身ひとつをおもふなれは

年わかく侍りける時たしめて百首歌よみ侍ける

不述懐哥

前大僧正慈円

行末をみかさ山をそたのむ身をこそ思ふまよふあらそ

思ひしらす

大僧正行尊

かりとおもひそ道世中にあるに心へよ海つくなる身

僧正行意

さつきにそちきりしことのかひあるらしまつらぬかせよ

如願法師

渡りそめし道もかはらぬ法の道もおそきにおはせ神代

藤原光俊朝臣

思ふことわかりそひたちにまかせそこはとおもふそこなき

世のなかにもしこふへや侍ん人よつくに

しけり

後徳大寺左大臣

わかの浦風ふきやむかしのともより君のあはれと思ふ

右大臣に侍りける時百首歌よみ侍りけり

述懐の哥　　　　後法性寺入道前関白太政大臣

いにしへの恋しきあひまにしらすこそ行ぬ別はけふにかきりき

述懐乃心をよみ侍りける

左近中将公衡

身のうさよいつふるならん人しれぬこゝろはまさるなり

題しらす　　　　摂政太政大臣

行くもとまるも頼むはかなき世中に人の心のあはれなりけり

寂蓮法師

さても又いくよかへてん世中にうき身ひとつのはてそかなしき

文集天可度の心をよみ侍りける

藤原行継卿下

まくらのみしらぬ身をすてゝ人のこゝろそしられさりける

ちりし世とのかれて大原山のしは室乃苔なと

に住侍りけるころ継雅御房の供養の

供養乃導師のれうにさそひ侍りしかは侍りし

にやまふにそ侍りけるに志かれし侍けれはよみ

乃来世けよみかへりてよみ侍ける

法印聖覚

身をもよに山へとめくるむしかきそもうき世よふるそかなしき

題しらす　　　　平泰時

世中にあさはあとなくなりにけり心のまゝによもきのみして
高倉院御時つたへそうせさする事侍りけるに
かきそへて侍りける　西行法師
結ひおきてふかきさとりをえてふ世なるらんいまもあり
あけしらすかくふますけ時よりはひとくの色をそふらん
醍醐の山にのほりて延長の御影寺をおかみ
てよみ侍ける　中原師季
なをとむる世には昔にかはれとも道はそみちしられ
内大臣に侍ける時家百首うたに述懐の心を
前関白

川淀といつくもあらん舟人のよるへさたむるかちはなけれと
おなしことを述懐うたによみてまつりけるつい
てに　御製
ありしよにあらぬ道にまよひつゝかへりみるひとことに昔と遠き（そむき）
述懐のこゝろをよみ侍ける
内大臣
いかはかりに契をきてそみかさ山かけにひさしくまて月をみるらん
定家少将になり侍て月あかさぬ秋ころ
こひ侍けるを見侍てつかはしける
權中納言定家母

麦白山みちふきとけし月影よいまそくものやへふかれなる

千五百番歌合に　二條院讃岐

忘あけてもやしるき雲の月やはちかくしもみえん

後の世の月もとこゝろさゝへこゝろみれはしよふかぬ日ぞなき

源為相一﨟殿上人にてそうふりのかれとちくるけり

侍けるによみ侍る　道信朝臣

雲の上かつらのもみぢおさきこそそふらふとてん雅のみさき

頭中将よ侍りける宰相になりて内よりい

て侍りし内侍のもとにつかはしける

讃述云

おりゐる雲のうへのゝ忘れてあまつ空ゆくんちそれ

殿上人へまそうぬりおりてい?こふとある

しと侍けるに　藤原相如

年へぬる雲ゐをはなれてあまりのゝのかはらふまさんとえん

こころしめしておかせられ侍けり

圓融院御製

あまの川雲のかよひ路かさねあれはさふらふむかしのことをゆかしや

彩年よまゐりて大将にて年ひさしくなる

ことを侍あるころとさめのうちたにひつけ侍る

内大臣

三光やつひかりをさくらはさしてきつる世はこよひたちそ

花のちらしひらけしこゝろそてもしらく

かりにつきたまりて紀のさかりとこま

いりて出給けるに　権中納言定家

おさまれるたのつきせぬ川きよの二てひさしき命なり

関白太政大臣百首歌よみ給ける眺望寄

百敷のやへのへと出る秋のくまなくむかふ山の月

建保四年百首歌たてまつりけるに

参議雅経

うき世さへ清みるれ行し神よ文をそいはまの月をみるそうらむる

月夜の庭しろくして述懐といふことをよみ侍ける

正三位知家

老の坂のほりつきぬるわれとやこえゆく人のあとにならん

暁寄といふことをよみ侍ける

前中納言定房

明くるまて物思ふ宿のなかそらにあかつきの月のかけに逢ける

按察使隆衡

人の世をと何とて昔をみかへしと心をあけくちをし

参議雅経

月のこへてよゆりゆく影の夜のあはれともいひさしてよその嘆そする

左京宗経卿女

暁の鐘そあはれとしらみそふる世の夢さむる毎にふ

遠鐘幽といふことを

入道二品親王尊助

をつき山かしのはらにたえ〳〵にきこえてつくる鐘のをとかな

暁述懐のこゝろをよみ侍ける

正三位家隆

ゆふとゆきつきそのなからん老ね覚よはくるゝ鐘

法印覚寛

身のうきを思つゝけぬあかつきにおくらん露の行すゑさへや

題しらす

俊頼朝臣

なにとなく杉本のそはの山てらにさてひとりねるゝかなし

寂然法師

はかなしとむかしきゝとなかめつゝ入逢のかねにおもひて袖ぬれ

法橋行賢

撞ことくてそらに通ふなれおすもさそふ鐘の音かな

前参議俊憲

あはれとはかりといふまてきこえてきくともきゝしつかな

源光行

いつもあかつきをとくや思ひそ入逢の鐘に昔なけゝり

家五十首に閑中燈

入道二品親王尊助

これのみと友なふかけもさ夜ふけてひとりそのこすさ窓の灯

従二位花宗

長秋の夜ふかきかえゆく窓のうち小松のこりともし火の影

述懐の心をよみ侍ける

侍従具定

あつめこし蛍も雪もとしふりて身をてらさぬ光なりけり

方磬をとらせ侍きつゝ老のつちもそれてお

かへ侍けるは讀る

上西門院武蔵

ゆきにけるわか世のかけをおもふにもうちさへなくさへて三瀬

哉しらす

行意

月はかくてのちふまへれはいかれ光なかるあをそすゝ

哀これも今の世よりまた後へつきのもと思ひすゝめ

俊彬朝臣

難波かたあしまおりけぬうゝ宮ゐりきぬおりつみや

なる身かなあはれとものこゝみかはゆくもへさなき世

僧正円玄やまひよろしからさりけるにとひ侍ける時

よみ侍ける

権大僧都経因

のちもみたれし山は雲にみえてゆかしなに事やまたん

文治のころほひ千載集えらはれし時
定家かもとにつかはすとてよみ侍ける

静圓法師

わかふかきこけの下まて思ひやるうつもれぬ名をみる君もかなさん

おなし時よみ侍ける

荒木田成長

かきつむるみちのやまのこのはのしるしにもちらん詞そなき

寿永二年おほかたの世しつかならす侍し頃
よみおきて侍けるうたを定家かもとにつかはす
とて侍みなかにいゝきつき侍し

平行盛

なかれての名たにもとまれ行水のあはれはかなき身は消ぬとも

法眼宗円

和かの浦にしてましおあま人か藻草すさひつゝかき集めん

行念法師

わか葉つむやゝいかなる我身にもよそなからん治

西行法師自歌合をつかひ侍て判
の詞をこへ侍けるにかきそへて侍りける

皇太后宮大夫俊成

契おきし契のうへにそへおかん和かの浦ちのあまのもしほ木

返し　西行法師

わか國は末さかゆへき契をそ思ふ君かよの始なれはみ

源氏の物語をうつしておくりつかはすとて

つかはしける　従一位麗子

たちかへりそこにありとはいふともわか思ふ人は義とそみよ

新しらす

和泉式部

春やくるかも咲とも見えすさりきうき家のそこなる櫻花は

貫之

春やとき物やおそきと春ことの色も木ことに世をしるへ

なけくとて侍ける時述懐歌

後京極摂政前太政大臣

敷島や言の葉しけき道見て山本のふかくや宮よりはるかそ見ゆ

くもりなきさかりの光をあふきても神やまもとの月を松ふ

ひとり思ひをのへ侍ける哥

鎌倉右大臣

山はさけ海はあせなん世なりとも君にふた心わかあらめやも

新勅撰和歌集巻第十八

雑歌三

世をのかれてのち四月一日法服袈裟をと見
侍りて　法成寺入道前摂政太政大臣

けふさらに夏衣たちかへてもちしてぬれなをそとおもふ

返し　従一位倫子

まちしらぬこゝろの色をとりかへてきみかなかにとみえそかさき

少将高光横川にのほりて出家し侍りける
ときゝてふすまてうしてつかはせける御歌　天暦中宮

露霜のよひ暁におくこれは衣やころもふすまなるらん

高光横川にこもり侍りけるにとふらひまゐりて
よみ侍りける　東三条入道摂政太政大臣

君こそむ横川のみやまはるかなる海のあかやむすよふかきこれは
おほし時恒法云然濡依よ侍りけれは少
将になり侍りてまもなくひに大納言のもとに
まかりてとふ侍りけるを見てよみ侍ける

大納言師氏女　高光妻

それとみる雲はきれつゝ山のはのあくるをまたぬ袖のあはれはまちけるかな

右近中将成信三井寺にのほりて出家

給はせけるに袈裟つゝみすとて袈裟よむとて
ひつきを給ける　一条太政大臣
となむありしをみれは涙もとゝめす君か山ちにさそふ紅葉
母のやまひかきりになり給ていむことうけ
けるにさせて給ける袈裟を返すとてのち
につけて後給へる　右近大将道綱母
蓮葉の玉となるらんと思ふにも袖ぬれまさるけさの露かな
伊勢集をとらせて人のかへしつかはすとて
よめる　中務
なき人のゆきのしたにもとてこゝにさかさすやまとゝそ袖をぬらす
よし子と物語りして母のことなと
いひてよみ給ける　大納言清蔭
いにしへも世にあるなきさとこそきけは嘆といひて君に逢き
後一条院のきさいの宮かくれさせたまひて
きさらきの御たちのこやにまいりてよみ給ける
権大納言長家
春の日はとさくらも桜の匂さへいつしかはなくとそ君に達給
返し　出羽弁
おもひきや年にそへてもたのまれてなにそ形見なりける
九条右大臣かくれ給けるとし新嘗会

こゝろ内の女房につかはしける

藤原高光

君かよのはしめのとしにこよひこそ月日をみねそさかき

後高倉院くらゐをおりさせ給てのち泰誠雅

清かおもひし給て女房のもとにふみかよはしける

らさ内に京にまうりいてゝころよりしこさて

申ける

内大臣

ふるさとは世のならひそぬれとも都に猿といふらん

返し

左近中将雅清

ゆきかひし旅路のやまと出あへは数ならぬその雲深の袖

紅葉のこゝろをひあきくまゝひなけゝさてよみ

給ける中に

権中納言国信

君こふと草葉の露の世とゝもにふきそてしをれても袖そぬれ

くさりとて都つとに道の人ありけれはあさちふにゐて見るさ

あきはてぬ歌ともはまゐくさかのしく嵐にちる道はかり

おもしろ香隆寺にまうりて紅葉ともそて

よみ給ける

堀川院讃岐典侍

いつみにふる波にそむきしや紅葉もふゆさゝまさるらん

貞信公かくれ給てのち家にゆかりてよみ

給ける

九条右大臣

ゆきかりみしハ昔の紀なるへし物しけそと思ひきこゆる

天暦八年おほきさいの宮かくれさせたまひ
て五七日御誦経せられを給けるにみてこの
けふのためにまて給ける

菊とそあきてうれハ玉つけとふむかしきよそをくれ

式部卿敦慶のみこうせ給ひける春よみ給
ける

中納言兼輔

咲ぬれは風待ほとの山桜人の世よりハひさしかりけり

後冷泉院の御ふくに侍けるころ花のもとにて
と女房よりよみてつかはしける

大納言忠家

いにしへの花見しものをわすれにし袖ハおもひて
をしらす　時しゆかぬ
峰まてあはれ人のなふるさに山の雲とそたなひきにける

人麿

見よしのの山のふもとの雲につよくはなれとおもひしを
雨ふりぬきさらしふのへといふらむつ
つくねをなとつらしけるふみへ月まちに
けるよみ侍る　猿丸云

白露ハむすひやすきと花をとて人をさそふらむ秋

題しらす　相模

ねさめをもふやとれる露の月かけにとりのねをこそきかれ

後京極摂政前太政大臣

をとめこかふりまねくゆきの山かけに玉ゆらにほふむめの花

入道前太政大臣

こや瀬川よるこそ舟人けさはこほりとめぬなみのあはれ世中

前大僧正慈円

よしへ山家まれなる峰のあらしにも人のこゝろやいとゝさるらん

俊恵法師

あま山こすゑも烟ゆめりとものくなかめし人をもうらみ

源有房朝臣

程もなくひまゆく駒をみても猶あさましきあまりさへそ

正三位家隆

ありてうきも身の命をたのむかなさてもすきにしかたをしのはむ

なさけ人のうらみをかけよりさせ侍けるに

前大納言忠良

あはれさはいかにとゝますかゝみけさふかゝれとらぬの侍らん

歎くなよこれもいつゝ世のなかはいそとなりさまかはるらしとこそしき

従三位頼子かくれ侍にける秋月をみてよみ侍ける

入道前太政大臣

あまたゝし文かゝりけるのかゝるは雲くもれても月か出る
かなしくと思ひてよみ侍ける
八条院高倉
秋にあひぬ母の面影のおもかけくもりても(し)かくれなん
式守卿臣母身まかりにける時大臣もとより
よつかし侍る　大納言実家
そをしれとふりにしものかなしかりけるおもひそいつて(心)
返し　後徳大寺左大臣
忘らるゝ時しなけれはしのゝめの涙かそへそかへ
参議通宗卿臣身まかりてのちつゆにかき
つけし侍ける母のもとにいひつかはすとて
よみ侍ける　大納言通具
身にそへてとゝめまほしき思ひへきをはなしと
皇嘉門院隠れ給ひにけるのち八条院高倉
院の御はてにすゝき侍りけるに後藤へりとに
つかはしける
後法性寺入道前関白太政大臣
こゝろ世はさみかされ(し)たれ我のこゝろもやいかにと
母のおもひにて小山に侍ける時よみ侍ける
同大臣
皇嘉門院かくれさせ給ひて稍色そめぬ袖のしくれに

周忌にてよみ侍ける

見ぬ人のかたみとおもへとも雨のけはまさる月日を
やまひにしつみ侍けるにかく新かねうまう
つかねとさせて泰覚法師かりにつかはし
ける

賀茂重保

わ白の露わけて月をこよひしも出んさえまさる人そ恋しき
後京極摂政かくれ侍にける時よみ侍ける

藤原親康

このよをはみすてゝかのつかなからましかは遅き
賀茂重保身まかりてのちつねによみ
侍けるのちも猶あはれを過去なと
いつくとよみ侍けるによめる

覚盛法師

しらすして身の宿は昔にて雨けのこそあはれなりけり
世をのかれてのちかくの述懐といふ心をよ
み侍ける

藤原親盛

かへりこし月に昔を思ひてそ淺きにふかき山の井の水
影しらす

前大納言光頼

ゆくへのむすふなかに山の井の水をまてすまむとみ世かな
花のちる世の月あかりにくらふによみ侍ける

法印覚寛

とまりゐる身も老らくのちか道ハ行ゑもしらぬ別そかなしき

故高倉院かくれさせ給ふてのち[illegible]

侍けることを思てよみ侍ける

平信繁

先達と歌よみしも年月へたゝりぬる世ハかはりぬるのみおほり

おのゝち述懐歌よみ侍けり

能蓮法師

をくれゐて志らぬ命なからへてみそ哀なる世の別哉

入道大納言のかくれ侍りける時よみ侍ける

左近中将基良

物とれは志道ゝにとゝめかをそ涙のまゆむ時のみまさりける

僧正花云身まかりてのちに侍りける

ともをのむつましかりけるゆゑにかたらひて侍りける

侍ける時よめる

法印円経

いかにせんたのむ木陰の道よりも思ひ葉まとふ露の[illegible]

小侍従身まかりにける時よみ侍る

法印昭清

うらむへきよそのひとへにねとはとかけさへ別てあはれなる世の

大神基貞か身まかりにける時誦経せさせ

結縁にまかる　中院右大臣家にて講

わかれにし日はいつそともしらねとも昔の人をとふそうれしき

八条院かくれ給ひてのち御忌日八月十五

秋はおなしくて結縁のためふり給へれはよめる

藤原信実朝臣

やみはれてもおもふところなき空は秋のなかはにすめる月かな

文月まかりてのち月あふく結縁の秋蓮

生法師かりとしけつりけり

平泰時

山のはにくれにし人はみえもせていりにし月はめくりあひにけり

返し　蓮生法師

くれにし人のおもかけは月をみるにつけてもにしのそらかな

文集観愛別離宗落在者別離と云

心をとも結縁けふ　八条院の宮

あすはかなしの関をこえていかにせんかはりゆくまた縫

題しらす　行念法師

さためなきよにふるさとをゆくかたはあふの関せはあすかきり

郭公とふとなきふる結縁のなき

人のみちのさきつゝはかくよみ結縁

前大僧正道円

きのふのまつまであるとそいふや昔にかへる
くらゐみゆくらん

新勅撰和歌集巻第十九

雑哥四

亭子院大井山にわたりましける時勅使に
てまかりて侍けるにおりゐる雲のたち
のぼりけるを見てよみ侍ける

中納言兼輔

白雲のこのかたにしもおりゐるはあまつ山とふきそ経

題しらず

よみ人しらず

山高み世のさかゆく神代なる雲かへる秋から経
久遠のみやこれおほふけるをみてよみ侍ける

几の原にのみやこはほりまさりて大宮人のつかりいはまた

住吉社に百首歌よみてたてまつりけるに梅

哥

皇太后宮大夫俊成

敬出し梅ことにゆふ暮のはま月ちかきたちまちのはる

百首歌よみ侍けるに早梅を

内大臣

梅さくもしらぬとしのまた山城のよそのさとの秋の袖

建保四年百首歌たてまつりける時

僧正行意

山さとの春の枝の梅か枝に花のおもかけにほひそめけん

百首歌よみ侍けり

寂身法師

下草もいそくる色はあらはれぬきさらきのへの里の宿に

真昭法師

あすか川のせの霧を晴やらていつこににほふ梅の夕風

題しらす

よみ人しらす

世中はなにとやまとのみなれ川昨日の淵そあすはそかはるらん

中納言家持

千鳥鳴佐保の川との清きせを馬うちわたしいつか通はん

入道前太政大臣

春ハ花冬ハ雪とて白雲のたなひくみねのみよしのゝ山

正三位家隆

いまハはや花よ春をまてなき都の名のみのこりける

前関白家百首歌合によみ侍る

源家長朝臣

よそにふりはてやかさ山月かけて出る月影

百首歌よみ侍りける

後京極摂政太政大臣

冬の夜の雲なきみよしの山雲ハ千すゝかゝりけり

題しらず

よみ人しらず

いにしへハもろ人ゆく住の江の岸によるてふ忘貝

和泉式部

住吉の岸の月をながむれバよそにはなれて見えける

亭子院の御ともに住吉にまゐりて

御ともによみ侍ける

一条右大臣

住吉の岸にふきあふ白波そ志かすがに花咲かう

おまへしみゆきふかきのうらによみ侍る

大宰権帥公頼

難波かた志けやの浪の夕ぐれハつまなきところあしのとそすゝ

返事につかはしける

よみ人しらす

くちにし昔なからの橋柱ありなからこそ朽ちにけれ
名にのみ流れてきこえける哉

正三位家隆

能勢のまつゆふまにこあれはこの山のやとつまにもあはぬなかめ

布引滝をよめる

藤原行能朝臣

布引の滝の白糸わくらはにとひくる人もいくよへぬらん

百首哥に紅葉をよみ侍ける

入道前太政大臣

下葉まてしくれのまゝに深くなりかはるあきのあらしかなしき

伊勢国にまかりける時よみ侍ける

安貴王

伊勢の海のおきつ白波花にもかつゝみていもか家つとにせん

恋の哥よみ侍ける中に

伊勢の海のあまの袖てもしほたれてみをのなみたひまなくそ

名所哥奉りけるにすゝか山

大蔵卿有家

峯ふく嵐にしくれふるすゝか山紅葉は雨とふりにけるかな

江浦月といふことをよみ侍りける
家長朝臣
あつさゆみいそへの浦の月かけにあまのつりふねよるかとも見ゆ
しつかすむのまとかりにゝよみ侍ける
中務
ゆきをいかにゆくはしらなみにこそ思ひなりけれ
前関白家歌合に名所月といふことをよみ侍りける
正三位家隆
光そふすゑの松山月にあきとまつまつひとはいかにこゝろか中山
藤原光俊朝臣

さゝ浪の光もさえて白妙に浦なみかけの橋は秋の夜の月
題しらす
よみ人不知
さよふけて浦の橋とおもひみよ下ゆくみつのかけやとまれると
平兼盛するかのかみに成りてくたり侍りけるとき餞し侍るとてよめる
大中臣能宣朝臣
ゆきかへるたひをもするかふしの山たえぬ思ひも立なかれ
家五十首歌に
仁和寺二品法親王守覚
松のねにそよかせこそよしたなひく雲よりうへにすめる月かけ
みなゝ百首歌よみてたてまつりける時よめる

従二位範宗

世とゝもにわかさへむかふの山煙よそまてつゐに白雲

思ひしらすや ゆくゝ

竹とふく窓よりうなるゝ浪のうとうとも人の声まれや

百首歌に　後京極摂政前太政大臣

わかれ霞分こえゆく志のゝめに一村すゝむほとゝきす鳴(のく)て

題不知　小町

むかしのゝむかしのひとの花の峯(?)はねをみても哉とそ思

まみへしら浪

ろ志かせは花の海をも漕舟のみなかにかゝりて(?)も

前大僧正慈圓

わたしゝや昔はまゝのつきさ橋とこそなれてこゝろまよへすまぬ

むなちにまかりてよみ侍ける

能因法師

よそにのみおもひ越し(?)のみねの白雲にふすかは

天禄元年大嘗会悠紀方屏風哥

清原元輔

かゝる浪の渡の音羽れつゝまてさへ乃花なれはさかえん

山よりおり侍りけるみちにて月をとてよみ

侍ける

前大僧正慈圓

おほゐ河嵐吹風に雲はれてみかさの山に月そ入ぬ
題しらす　徳大寺左大臣
春きてはむかしみえん峯のつらゝ木の間よりまる雲
参議雅経
花さそふ春世風ふかきうらみはちる木はまつの苔乃埋木
伊勢勅使にて甲斐乃むまやにつき侍ける
日　後京極摂政太政大臣
ちるらむみねのあけほのにやそせこえてけるぬやまとの村波
題しらす　よみ人しらす
とき夏に侍しな川のなかまてもちら紅葉をみちん物かはに
寂蓮法師
とくさかるそおきさぬ袖かまてみつぬ露も玉ゐり
志らぬの心にゆかりけん人よあはれ物とくり
侍ける　源有教卿
ころかよ行さ海のあけれ姫よも年へてさゝえぬ思ひのかくら
題しらす　よみ人しらす
みちのくにおりたちにける玉川のあまにかゝるらんおもひそのかけ
陸奥守に侍ける時忠義公にかりに中を
くり侍ける　源信明朝臣
ゆふ暮のまくれのうくとなつるまつ

題しらす　　　よみ人不知

はらふともいはねの山の岩まなる草の袂そ露きえは
なみたあまりて結けり

清輔朝臣

夜風吹はよみをやこしの浪のこゝろよりこゆるも恵風小

題しらす　　　祝部成茂

山のはまたかけかたき月まてはちりて松かけの鶴

寄露恋といふことを

寂延法師

思ひ出るこの葉もしらて下草に結ひ置ける露はなにかは

題しらす　　　平政村

花木のこのしたくらき夕露も涙にまかふ物やなかるらん

天暦御時御屏風に

源信明朝臣

昔より名にふりつもる白山の雲ゐの雪はきゆる世もなし

百首哥たてまつりける時

大納言師頼

かくしつゝまゆきやますむ峯の雲いくへかゝりぬらん峯の白雪

題しらす　　　よみ人不知

鶴とゐふこの川のみなとたえすして恋しき人にあはんとそ思

前関白家歌合によりて月といふことを

内大臣

夕露は河瀬よりみるよはやまのをのへにいづる月 影

しらず　大納言公継

こゝろ浦磯のむろのきみかよにおもひいではわするやは

後京極摂政前太政大臣

浪あらきむしあけのせとにゆく舟のまちこしせよおきつしほかぜ

入道前太政大臣

美保の雲ゐをりもとほすたま章かりのまたねの

よふ人ぞなき

いとゞまた玉とちるさゝ波の中のみなとの月

ものおもふ人をこえしかへしいとゞ浦わのみちのあけぼの

正三位家隆

時しあれゆくらとも思ふ風の吹く浪よ奈の白雲 浪

なほ宗にもみえけるに

前参議教長

浪よする吹上の浦の浪風に時もわかぬ霰ぞ 降る

堀河院の百首の歌たてまつりける時

権中納言国信

おきつかぜすゞしくわたるつみよりみとも知るはせ 宗

百首哥に眺望の心をよみ侍ける

入道前太政大臣

和田の原浪とひとつにみえてまの濱風に山の色そ

見しらす

七條院大納言

みるまゝのうつれる松の色もむかしさてよる浪のさゝ浪の

後京極摂政家百首哥に草哥十首読

侍けるに

寂蓮法師

風吹は岡松ゑの向草露ふりそむさとちるかな

家に十五首哥よみ侍けるに晩霞満浦

といふ心をよみ侍ける

中院入道右大臣

あかし潟海に舟やかへるらん風にむかふ霧か

和哥所哥合に海邊霞といふ事をよみ侍ける

前内大臣

なにち潟塩干の烟みをよひく霞とゝもに帰る舟人

見しらす

よみ人不知

志乃あまの塩やく烟風をいたみ志ゐのきさ悲とも我か

志賀の浦のめくり志らやさしき海ならて世をしらぬもみぢに

前大僧正慈円

家しまつれる程になさとそ見なくまれ雲をみなか

秋山鹿といふこゝろをよみ侍ける

正三位知家

あさち山いろかはりゆく秋風にかれなて鹿のつまをこふらん

新勅撰和歌集巻第二十

雑哥五

源政長朝臣の家にまかりてとまりてよみ侍けるに初冬述懐といふ心をよみ侍る

源俊頼朝臣

やまさとはふゆこそことにかなしけれみねふきまよふ木からしのかせとをそとたゝく音きけは庭のおち葉にひまもなししくれにくもるまかきにもちりかゝり今はわか身のなけきをはなにゝつけてかなくはあむ雪にしかりてしをれ萬葉にはらへは

流れうらん　名はつきてや　あさゆふは　わかきみ人の
まれとまつらん

返し

いつくわかさふし志てら名みの高き和哥とこそなりつらん

久安百首つかうまつりけるなかうた

皇太后宮大夫俊成

志きしまや　やまと嶋ねの　風として　吹つたへたる
ことの葉ハ　神乃代より　かは竹の　世ゝになかれて
たえせねハ　いまもはこやの　やまかせの　枝もならさに
志つけきに　むかしの跡を　たつねてハ　みのゐに高を

多きしけく　よものことはを　なくさめに　わかみなし人
かきそへて　りかめのかり　たちまさり　ゆく末までの
ためしとそ　志きしまの道　空中なる　これをとへハ
きこえし世よ　あふきまうて　ふしきを　みちたれは
むかしまての　志らぬことの　うちひとつ　三世までをなは
なきれにも　うつりかはりけり　身もれをも　ともへなし
みすゝやま　みのつきれ　まつえの　いつはりなる
もとふかきや　かれ葉なる　うきそくに　いまもなたえね
志つえにて　下のみちよ　こゝろよりて　いつかはなれに
とし多く　左とそへも　盛のより　よりあはれ

ゆこりて　夜の志ハ草　といそく　きのひかりハ
ときはく　般ハまつの　えとのこ　露けき袖を
いつとても　とふ人なき　まれなとに　ゆかりの
月かけを　待とうれふ　なかめても　といふてるに
おそうれ　むなきぬれハ　なのつゝ　のこさんとも
おやなきに　なにハゆとも　ゆめのうきふれ　わか思ひの
かりそく　ときひよあそ　ならはしと　こゝろうき波の
あちこり　うつゝみとの　かこゆふ　人のかりけり
なきつめて　ときん給ハ　みちのみれ　思ふすらむ
とられゆく　志のふかれ　梅やなりん

えしうこ
山川のきよきなかれハ志ら行末の見えすなかれ
清輔朝臣
あはれなる　こゝ月の雉を　つまもなく　といりなす
とそくゆく　ありけるに　うたれ　世すとも　かしの
山の端の　あそふらあれ　ゆく思ひなく　なりなましかハ
まつえふ　千世まてと　ゆく影の　まれなりとに
いつそうそ　きふハおもふに　かりとふ　くち木の松を
くちめそう　昔のむかし木　なふとを　といひそふく
金竹乃　ときは世まても　志られまし　うつゝとおもて

とはなく　とはかるあ　とりかへれ　とことをおほはん
なくなきの　しつえたに　ことしなく　この下くれ
ゆくえ川の　あはれさに　帰せけん　うきあつめて
くち葉にし　よしも何そ　いまはこれ　何まのやくらめ
なきれ世に　とおめんとそ　やけしかるさ
上西門院兵衛
思ひそれ　雅かみちれ　そうくれ　くもそめて
えそせとを　風に散ぬ　散るさとを　思ふなぬく
なふとも　むなしきに　ともむ月を　うき世にめくる
よそにして　あまくと　みおしふ　つれには花と
なりそそ　春かへしは　あかなくの　うつろひの
かはるさへ　はかなきまま　うつれたりの　こころさを
数なしぬれ
権中納言通俊卿の家にて旋頭歌
よみ侍けるに恋の心をよめる
俊頼朝臣
つまなさを　たりひあし　みしみて　何まのいさり
まくなくの　うりたをも　のかはし河
家に人々まいりて旋頭歌よみ侍
けるり猿のこころをよめる

在原照郷卿

草まくらゆふ露ならぬ藤衣袖もしほれり
おさかりす秋のくそくさなり
百とせのあとてきりけり藤のころ

清輔朝臣

松のはは霜からひめもはつそおりひやはんや
いりつゆめふるゆの華

物名

つましらんとよみ侍ける

伊勢

風さむみ鳴かり金の声よりうらみ家とさへやはしまし
志ゝとふ
けふもある袖をしをそてつれなく波の玉の数はそまし
色ふかく

躬恒

としふれはよはひまされるまちまくへ君をこそ見るにあかて逢ても
一りとこそ
おもひともととききくめかはなおもはりたるそかし
何もしら

二條太皇太后宮大貳

数ならぬ花にしはむものこそまちはなかひもなからん
こそしれけ

風はゆく雲とはなるとも我はみもなほたえまの橋とのみこそ
さ
わくり　権中納言定頼
まちかりなまとふすらん雲とくへてわくりもゆきあらそ
ふ
それの花　俊頼朝臣
とれは木のまにまてひとりみえつゝ春をへて道にや霜
しらん
このたまのそやしろ
あるしみやこの志賀の浦やしらさゝの雪にまよふ波の音ぞ
久安百首よみ侍りけるに
大炊御門右大臣
太刀はきて手すりて見ひまそあれおちてみ瀬ものをとりは
とはれぬのふるき　左京大夫顕輔
浮きをいつるたのむ道にも逢ふかなまていはふ身とはおもや
うらめしき　清輔朝臣
むなしくも過ぎさてあはれなとさてつゝこれ志賀の浦の道さ
かき
かけのやまと　花園左大臣家小大進
霜重ねはてそれゆめの冬草もいかにつゞまの葉さへ霜
まね
うらめしさとぞ待ちける　従三位頼政
むさし野のゆかりはまたにも志賀のさゝ波のかくもしら道
かりあらしきくとよめる

基俊

ちる紅葉しくみなけふよ苔の下みちそことも
おもふらんよしをこにやまかくれつゝ

後徳大寺左大臣

これやまとしふかくしたせに忍しまふ松かえやまもらん
さむのうし

殷富門院大輔

かりころもしほたれてふかくてさむものゝ露まよふてまとゐ
みしさはふかきゆとしめ

源有仲

有明とやまちの里はおほふになりゆきさらの庭ましきれす
ますそ

志きりなのやとふとくと人のまよせ待るれ
なし

鴨光兼

つてとこそりは野山にまよれ紅葉ゆくへしるうてかりのみち
芸つましくに待けまは桂大綱云之昇許
まほうかしきか

俊頼朝臣

まる也遊ふ亊のつとを山田つくりつそをそこふもみちてなかめや
返しいせしやそでなしてなしいさ秋
あまつゆにとかむさそひ待けり

堀河院御時殿人所にて殿上まほりけるひけり
おとゝいくさせたまひしてこいくしもさとき

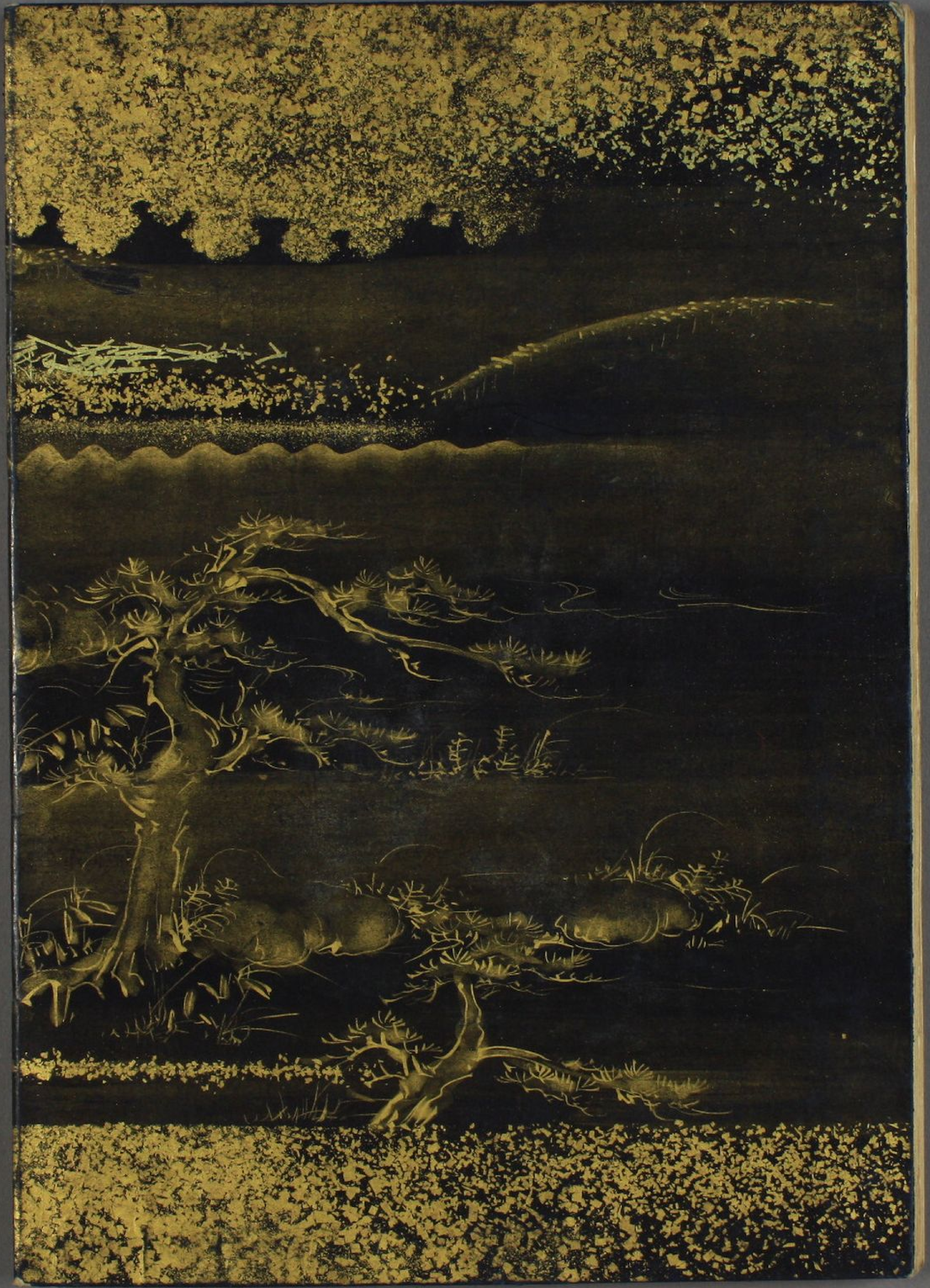
のふるさとへかへりけるにあまとおほせと給へれ
いつゝまつりけり　権中納言俊忠

うたゝねもいとゝひとさき猿の音に白露よりも梅本にたちそふ
　　　　　　　　　　　　　　橘廣房

こゝろとゐむとにしも音さへ志つをも句にも菊も下えて
こゝろとゝむる梅しの山をとよみ給けり
　　　　　　　　　　　　　　藤原顕能朝臣

こゝろ無ふかく見つゝ遠路たえぬる露やたちぬ皇
庚申の夜あやめ草をとりて句ふよみ
給けり
　　　　　　　　　　　　　　二條太皇太后宮大弐

あかさかの雲ゐにゐむとかすくるゝらむくらく
たなしりあれはそよみ給ふ
かふとよむ浪の猿あまやゆくも忠志てさそみえけり
春のそしめふに定家にあひて給まうつゝく
よ僧正聖宝まさとはじめ給とまて少将
なりめをうけて春のはまて給よしと
こゝろ給へれはおこたれこそまゐれと申てよ
み侍けり
　　　　　　　　　　　　　　大僧正親厳

まつはこの日にめつらしかりけるにとおもひたまつよ
なしへてそみゆる

拭老眼一校直付字誤訛
非黙撰者明静
以相傳本為邦朝臣所令書写也
可為證本矣
権中納言為秀判